

(様式2) 実施計画書 兼 報告書

女子大学

企画課管理用 研 ー B ー 1

推進主体	国際文化交流学部 【旧 運営委員会】
責任者	国際文化交流学部長 【旧 女子大学長】

分類	実施計画	開始年度	完了年度	将来的な継続
研 ー B	学際研究の推進と若手・中堅研究者への支援	令和 4 年度	令和 9 年度	あり(予定)

① 目的・内容

今次の中期計画の中核理念である「グローバルで多様性に開かれた学びの空間の構築」を支える学際的研究を推進するとともに、若手・中堅研究者のさらなる研究の充実に向けた支援体制を整備する。

学際的研究についてはグローバル化、ダイバーシティ、ジェンダー、SDGs、ポストコロナなどに関する共同研究を公募方式で遂行する。研究期間は4年間とし、研究成果の発信に向けて国際ジャーナルへの投稿と図書の公刊を求める。また、学際的共同研究の成果を、リベラルアーツ教育改革、共通科目改革の一環としての新たな授業科目(総合科目)の開講につなげる。

若手・中堅研究者の支援については、基本的に個人研究とするが、学際研究と同様に公募方式を採用する。従来の「学芸院女子大学特別研究費」による研究が1年であったのに対して、研究期間を2年間とし、国際ジャーナルへの投稿と、研究成果の展開として科研費(日本学術振興会)への申請を求める。そのために、英語論文の作成や科研費申請について支援体制を整える。

② 到達目標(数値目標/定性目標) ※数値目標を設定できない計画は、定性目標を設定すること。

①審査・進行管理・及び支援体制の整備(公募要領の策定、審査委員会の設置、審査と採択、進行管理、研究支援)  
 ②採択件数(学際的共同研究:1件、若手・中堅研究:全体で3件)  
 ③国際ジャーナルへの投稿、科研費の申請、書籍の公刊、授業の開講

③ ロードマップ

年度	令和3年度 (2021年度)	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)	令和8年度 (2026年度)	令和9年度 (2027年度)
予定	学際的共同研究: 公募・審査・決定	研究の開始	研究の遂行(国際 ジャーナル投稿)	研究の遂行(国際 ジャーナル投稿/図書 の刊行の準備)	研究の遂行(国際 ジャーナル投稿/図書 の刊行の準備)	新授業の開講	新授業の継続
	若手・中堅研究者 支援:公募・審査・ 決定	研究の開始 支援体制の整備	研究遂行(国際ジャー ナル投稿)・科研申請  公募・審査・決定	研究の開始	研究遂行(国際ジャー ナル投稿)・科研申請  公募・審査・決定	研究の開始	研究遂行(国際ジャー ナル投稿)・科研申請

④ 数値目標の詳細 ※設定できない計画については記載不要。

指標の名称		指標の定義(計算式/説明)					
1	直近	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)	令和8年度 (2026年度)	令和9年度 (2027年度)
目標							
実績							
2	直近	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)	令和8年度 (2026年度)	令和9年度 (2027年度)
目標							
実績							

(様式2) 実施計画書 兼 報告書

⑤ 実施計画／実施報告		
年度	実施計画	実施報告／今後の課題
(2022年度)	学際的共同研究については、本中期計画の開始に先行して令和3年度に行う公募・審査により採択される研究をスタートさせる。研究期間は4年間で各年度の研究費は200万円である。若手・中堅研究者の個人研究についても、同様の方式で採択される研究をスタートさせる。研究期間は2年間で各年度の研究費は80万円である。あわせて、科研費申請などに向けた研究支援体制の検討を開始する。	研究テーマや研究の成果に関して規定する「中期計画推進予算による研究予算に関する申合せ」を全学的に策定したうえで学内募集を行った結果、①学際的共同研究1件(「企業博物館の設立と発展に関する総合的研究」)及び若手・中堅研究者向けの個人研究2件(②「福島県猪苗代湖周辺における先史時代の文化史構築のための基礎的研究」、③「異文化能力の共通ルーブリックの構築－エキスパートへのデルファイ調査をもとに－」)の合計3件の研究をスタートさせた。①及び②については研究計画に沿って研究が進行しているが、③については遅延している。
(2023年度)	令和3年度に採択決定し、令和4年度から開始した①学際的共同研究1件(「企業博物館の設立と発展に関する総合的研究」)及び若手・中堅研究者向けの個人研究2件(②「福島県猪苗代湖周辺における先史時代の文化史構築のための基礎的研究」、③「異文化能力の共通ルーブリックの構築－エキスパートへのデルファイ調査をもとに－」)の合計3件の研究を継続する。①、②については順調に進行しているが、③については遅延しており、年度途中で延長の可否を必要に応じて検討する。年度末に研究報告会の開催を検討する。若手・中堅研究者向けの個人研究については第2期の公募・審査・決定を行う。	①学際的共同研究1件(「企業博物館の設立と発展に関する総合的研究」)は、金城亜紀「A Comparative Analysis of Corporate Museums of Volvo and Isuzu」(ワークショップ発表)、金城亜紀・高柳直弥(学外)「Corporate Museums」、栗津重光(学外)「企業博物館を見る」、『BtoBコミュニケーション』に連載。若手中堅研究者個人研究②「福島県猪苗代湖周辺における先史時代の文化史構築のための基礎的研究」は、笹山原遺跡(福島県会津若松市)の発掘調査、福島県猪苗代町の桜川遺跡(福島県猪苗代町)の発掘調査を実施、発掘調査概報を発行予定。本研究成果をふまえ、次年度に考古学フィールドワークの科目を新設。若手中堅研究者個人研究③「異文化能力の共通ルーブリックの構築」はやや研究が遅延、次年度以降に研究報告『グローバルマインドとは?』を公表。②・③は研究期間終了、報告会を予定。
(2024年度)	令和4年度から開始した①学際的共同研究「企業博物館の設立と発展に関する総合的研究」は研究を継続する。若手・中堅研究者個人研究(第2期)は令和5年度中に公募により工藤雄一郎「福島県猪苗代湖周辺遺跡群の考古学的研究」が採択され、今年度より研究を開始する。また、昨年度の発掘調査の成果をふまえて、共通科目「自然環境論V(考古学フィールドワーク)」を新規開講し、学生を引率して発掘調査のフィールドワークを実施する。	①学際的共同研究「企業博物館の設立と発展に関する総合的研究」は研究を進め、栗津重光(学外)「企業博物館を観る」(『BtoBコミュニケーション』)の昨年度に続く連載、金城亜紀「How companies heal and maintain health: A unique function of corporate museums in Japan」International Society for the Comparative Study of Civilizations, 53rd Annual Conferenceなど国際学会発表2件を行った。②若手・中堅研究「福島県猪苗代湖周辺遺跡群の考古学的研究」は、笹山原遺跡と桜川遺跡の発掘調査を実施し、後者の一部は共通科目「自然環境論V(考古学フィールドワーク)」としても実施した。また、出土土器の年代測定の成果を日本文化財科学会で発表した。
(2025年度)	令和4年度に開始した①学際的共同研究「企業博物館の設立と発展に関する総合的研究」は令和7年度が最終年度で、これまでの研究成果をまとめて金城亜紀共編著『企業博物館の歴史経営学』(信山社)を刊行する予定である。令和6年度開始(第2期)の②若手・中堅研究者個人研究「福島県猪苗代湖周辺遺跡群の考古学的研究」も令和7年度が最終年度で、引き続き笹山原遺跡と桜川遺跡の発掘調査を行い成果をまとめる。後者は共通科目「自然環境論V(考古学フィールドワーク)」としても実施する。①・②ともに最終年度であるため、年度末に報告会を予定している。	①学際的共同研究「企業博物館の設立と発展に関する総合的研究」は、栗津重光(学外)が「企業博物館を観る」(『BtoBコミュニケーション』)の連載6件、高柳直弥(学外)がEuropean Business History Association年次大会にて報告(“Transforming Sustainability Challenges into Thriving Businesses: Sumitomo’s Besshi Copper Mines 1690–1973”)を行った。今後の課題は金城亜紀共編著『企業博物館の歴史経営学』の年度内刊行であり、現在本プロジェクトメンバーに国内外の研究者3名が加わり予定通り進捗している。②若手・中堅研究「福島県猪苗代湖周辺遺跡群の考古学的研究」は、笹山原遺跡と桜川遺跡の発掘調査を実施し、後者の一部は共通科目「自然環境論V(考古学フィールドワーク)」としても実施した。また、令和6、7年度における桜川遺跡発掘調査の速報展を9月25日～10月15日の期間、本学文化交流ギャラリーにて行った。笹山原遺跡発掘調査の成果は、日本文化財科学会(7月5日・6日、於九州大学)においてポスター発表「福島県笹山原No.16遺跡出土の縄文時代前期土器付着炭化物の放射性炭素年代測定」、研究発表「福島県笹山原No.16遺跡出土の縄文時代前期土器付着炭化物の放射性炭素年代測定」において公表された。
(2026年度)	若手・中堅研究者のさらなる研究の充実に向けた支援として、引き続き研究費を支給する。令和8年度は、若手・中堅研究(第3期)として、2年(令和8・9年度)の研究期間で学部の専任教員を対象に研究課題の公募を行った。研究期間の最終年度(令和9年度)末には報告会の実施を予定している。具体的には、橋本 彩准教授「ラオスとカンボジアにおける水の民話・信仰と環境問題への文化的アプローチ」、小林 亮一朗准教授「日英語における移動現象の比較統辞論研究」の2件が令和8年度よりスタートする。	